

氏名	王 辰
学位の種類	博士（経営学）
学位記番号	甲 第 6 号
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	中日企業の文化差異からみる異文化コミュニケーション
論文審査委員	主査 中山 緑朗 特任教授 副査 荒木 宏 教授 高柳 秀史 教授 樋口 徹 教授 山下 裕介 准教授 劉 永鵠 客員教授

## 論文の内容の要旨

今般、本学大学院経営学研究科博士後期課程在籍中の王辰氏から学位申請論文（以下、本論文と略す）が提出された。その題目は「中日企業の文化差異から見る異文化コミュニケーション」である。本論文は、G. Hofstede の文化の多様性に関する 6 次元モデルと E. Hall のコンテクスト理論のフレームワークを活用し、中日企業における異文化コミュニケーションの実態について分析を加え、理想的な異文化コミュニケーションに向けた対策を提言するものである。

本論文の第 1 章「序論」では、中日企業の異文化コミュニケーションに関する問題点が指摘され、多国籍企業における異文化経営と異文化コミュニケーションの具体策を明示することを本論文の目的とするとしている。序論の中で、西洋と東洋における異文化経営に関する文献研究を通して、本論文の理論的フレームワークを構築している。

続く、第 2 章から第 4 章では、既存研究を自身のフレームワークに沿って整理している。第 2 章「本研究の理論的基礎」において、本論文の中核となる概念が提示され、理論面から説明が加えられている。具体的には、文化、企業文化、異文化、多国籍企業などを定義し、それぞれの特徴や機能について言及している。これらを踏まえ、本論文における異文化交流を分析する視点が表現されている。

次の第 3 章「中日社会文化の差異に関する比較分析」では、中日両国の社会文化の相違、企業文化の相違、個人文化の相違に基づいて考察が加えられている。その際に、社会文化の基礎的な要素として、価値観、宗教信仰、風俗習慣、教育水準、考え方、コミュニケーション方法が挙げられている。それぞれの要素について中日間の比較が行われている。最後に、社会文化的な側面から中日両国の間のコミュニケーションの相違点が論じられている。

そして、第 4 章「中日企業文化の差異に関する比較分析」では、企業文化について考察

が行われている。そこでは、第3章で考察した社会文化からの影響に加え、企業を物質的文化、制度文化、精神文化、行動文化の側面から捉え直している。

次の第5章から第6章では実務面から検証が行われている。第5章「中日間の文化差異と企業内コミュニケーションに関する事例研究」では、企業内における異文化コミュニケーションの実態について調査を行っている。大連小野田セメント有限会社とTHK投資有限公司においてインタビュー調査とプレアンケート調査を実施し、理論的な枠組みの当てはまり具合を検証し、次の第6章で行う統計的な検証の基礎としている。

第6章「中日間の文化差異と企業内コミュニケーションに関する本アンケート調査」では、第5章で実施したプレアンケート内容を改良し、本格的なアンケート調査を行っている。中日文化の差異とその差異が中日企業の異文化コミュニケーションに与える影響を分析している。統計的手法としては、t検定、主成分分析、相関分析を用い、中日間の文化的な差異の存在とそこから生じる異文化コミュニケーションの問題点を統計的に検証している。

最後の第7章から第8章では、研究の総括を行っている。第7章「異文化コミュニケーションについての対応策」では、上記を踏まえ、文化の差異から生じる異文化コミュニケーション上の問題点を指摘し、企業内における異文化交流対策と異文化コミュニケーションのあり方を提唱している。第8章「結論及び今後の研究課題」では、研究の総括と課題が記載されている。

## 審査結果の要旨

本学の大学院経営学研究科履修要項および大学院経営学研究科における学位の授与に関する取扱要領に則り、当審査委員会は王辰氏の学位申請論文「中日企業の文化差異から見る異文化コミュニケーション」（以下、本論文と略す）を審査した。その結果、王辰氏に対して博士(経営学)の学位を授与することが妥当であるとの結論に至った。本審査に至るまでの過程と評価内容は以下に記した通りである。

王氏の予備審査の結果は「学位論文提出を条件付きで可とする」であった。予備審査後、研究科長を中心に本審査委員を含めた複数の教員による論文指導体制に移行した。予備審査委員会は王氏が自立して研究活動ができるように学会報告と学術論文の投稿を要請した。それを受けて、王氏は平成 29 年 12 月 16 日に国際総合研究学会で「中日企業文化の比較研究から見る異文化コミュニケーション—中国における日系企業のケースに寄せて—」という題目で発表した。そして、本格的なアンケートを追加実施した。王氏はこれらの研究活動を通して、『比較経営研究』（日本比較経営学会誌）に「日本企業文化の相違及び異文化コミュニケーション対策に関する一考察」、そして『国際総合研究学会誌』（国際総合研究学会）に「中国における日系企業の文化差異と異文化交流現状の調査分析—中国における日系企業の事例分析—」を投稿した（平成 30 年 3 月 18 日現在、投稿中）。さらに、平成 30 年 2 月 14 日に開催した本学経営学研究科主催の論文発表会において発表を行い、参加した本学院生と専任教員から一定の評価を得た。これらによって、王氏は予備審査の段階で課された学位論文提出に関する条件を達成した。

それでも、本論文の文献レビューとアンケート調査分析には、修正が必要な個所が多分に残されている。文献レビューに関しては、論点が不明瞭かつ冗長であるので、論点を整理し不必要な部分を削除する必要がある。そして、アンケート調査分析に関しては、主成分分析の指標の意味合いを見直す必要があるものがある。さらに、グループ間の比較分析結果を十分に解釈・表現できていない部分も見受けられる。他にも、細かな指摘事項としては、不適切な引用や注、誤字脱字等が散見されている。ただし、本審査委員会は上記の指摘事項は短期間での修正が可能であると判断している。

その一方で、本論文はツングース文化が日本企業文化に与える影響など新規性を感じさせるものであり、実務面でも重大な示唆を与えるものである。本研究において特筆すべきは、研究プロセスが着実かつ計画的に進められている点である。具体的には、本論文は文献研究と事例研究から得た知見を統計的に検証するという流れで構成されている。王氏は、ツングース色が強い地域で操業する 2 つの製造業に属する会社でインタビュー調査とプレアンケート調査を実施した。それらの結果を踏まえて、本格的なアンケートを実施し、主成分分析等を用いて、一定の研究成果を導き出している。以上より、本論文は博士(経営学)の水準に達したと判断されたものである。